題　名　屠所の羊　中　白い羊

作　者　ドーナツ

発行日　2015 年 1 月 24 日発行

連絡先　twitter：@donut_no_ana

tumblr：http://donut-st.tumblr.com/

※ horirium 様（@horirium）の考案された折本デザイン、楠樹暖様（@kusunokidan）の作成図を使用しています。

屠所の羊　中

白い羊

1

「ヨシュア！」

倒れているヨシュアにカレブがかけ寄る。恐ろしいような声に二人の耳は聾された。牙をむき出した獣が二人から少し離れ、赤い目でこちらを睨んでいる。

「クソ！」

ヨシュアは立ち上がりざま、苦痛に悪態を吐いた。足首をひねったらしく、まともに歩くことはできない。

「駄目だよ。動いちゃ。じっとしてて。どうせあそこから入ってこれない」

土の上に石が並んでいた。その外側から身をのり出している獣の片目は潰れている。顔を曲げるようにして傾け、残った目をヨシュアへ向けていた。しかし、次の瞬間には天へ口を開き、遠吠えを始める。

湿った森の空気の中を苔に混じって、甘い香りが漂ってくる。ヨシュアは周囲を見回した。

「足元に気を配って。意外なところに生えてるんだから」

身を屈め、カレブはキノコの採集に夢中である。ヨシュアの足は香りの行方を追いかけた。だが、赤い花を見たと思った途端、地面に叩きつけられる。ヨシュアは肩の痛みに悲鳴を上げた。

2

前の穏やかな快晴である。ヨシュアは室内に飽き飽きし、家の扉を押し開けた。途端に温かな日差しがヨシュアへ降りそそぐ。足は痛むが、歩行を続けられないほどではなかった。肩が無事な右手だけを上げ、伸びをする。ヨシュアは思いきり、戸外の空気を吸いこんだ。

畑の土と堆肥が臭気を放っている。それらを抜ければ、村を一巡している道へ出た。誰もいない。みな集会所か屋根のふき替えに忙しいのだろう。

ヨシュアは、さらに外れて森の薄闇へと足を踏み入れた。さきほどまでの陽気が嘘のように森は、冷え冷えとしている。振り返ったヨシュアの目に天へと続く柱が輝いていた。中央の広場に屹立している透明な筒である。

故のない恐れがヨシュアを苛んだ。慌てて目を逸らし、森の奥へと歩んでいく。

ヨシュアの前に村の境を表す石が並べられている。越えないよう注意しつつ、木々で狭まる風景に目をやった。視野の端で赤い花びらが揺れている。ヨシュアは思わず、身をのり出した。

その時、木々の間から黒い影が姿を現す。ヨシュアを突き飛ばし、散々な境遇に追いやった『人』だった。

昨日同様、願を曲げ、潰れていないほうの目をヨシュアへ向けている。しかし、黙はぼってはおらず、歯をむき出している分だけもなかった。犬たちが村の守護を担っているというエリの話は本当らしい。

「パカー」

ヨシュアは獣を怒鳴りつけた。

「開拓け！　クタバレー」

獣は四足歩行、体長は優にヨシュアの三倍はある。上半身が大きく隆起した堂々たる体躯だ。　（つづく）